〔救急総合診療科〕

救急総合診療科は、自宅から病院を経由し自宅に戻るまでの、患者さま・ご家族の旅路を支えます。

ER（救急外来）では、板橋区を中心に地域のニーズに応じた救急医療を展開します。入院が必要となった場合には、患者・患者家族の価値観に基づいた質の高い医療を提供します。病院を退院される際には、地域の医療機関、介護・福祉と密に連携し、退院後の生活も見据えた支援を行います。院内外の多職種、患者さま、ご家族と１つのチームとなり、より良い選択肢を提供します。



〔総合内科〕

総合内科は、特定の臓器ではなく患者さまの全身を診る診療科です。生活習慣病や複数の持病を包括的に管理し、全身のバランスを考えた治療を行います。

お薬の重複や相互作用にも配慮し、患者さまの生活に合った治療をご提案します。原因不明の発熱や倦怠感など、複数の要因が絡む症状についても、全身的な視点から診断を行います。必要に応じて各領域の専門医と協働し、患者さまにとって最適な治療を行います。「病気」だけでなく「その人全体」を診ること、それが総合内科の役割です。



〔消化器病センター（外科）〕

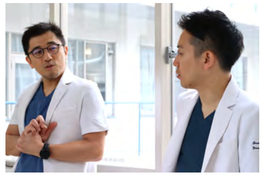
消化器病センター（外科）は、食道・胃・十二指腸・大腸といった消化管から、肝・胆・膵領域、さらには原発不明の腹腔腫瘤まで幅広い疾患の診断から治療までを一貫して提供しています。

手術治療では、従来の腹腔鏡手術に加え、より精緻な操作が可能なロボット支援手術（da Vinci）を導入し、胃・結腸・直腸・鼠経ヘルニアに対して安全性と低侵襲性を両立した治療を行っています。悪性腫瘍に対しては、病期や患者さまの背景に応じて化学療法・放射線治療を適切に組み合わせる個別化治療を実践できる体制を整えています。治療選択の幅が広く、院内で完結できる総合力が当センターの強みです。



フォトギャラリー















IMS グループ　医療法人社団明芳会
板橋中央総合病院

〒174-0051　東京都板橋区小豆沢 2-12-7
TEL　03-3967-1181（代表）

板橋中央総合病院
ホームページ

標榜診療科

内科／呼吸器内科／消化器内科／循環器内科／血液内科／腎臓内科／人工透析内科／脳神経内科／糖尿病内科／腫瘍内科／内分泌・代謝内科／外科／呼吸器外科／消化器外科／乳腺外科／心臓血管外科／整形外科／腎臓外科／脳神経外科／形成外科／美容外科／精神科／リウマチ科／小児科／皮膚科／泌尿器科／産婦人科／眼科／耳鼻咽喉科／リハビリテーション科／救急科／放射線診断科／放射線治療科／病理診断科／麻酔科／移植外科／肛門外科／小児外科／アレルギー科

MAP



交通アクセス

≪電車をご利用の方≫
都営地下鉄三田線「志村坂上」駅　A1・A3 出口より徒歩 1 分
≪国際興業バスをご利用の方≫
MAP バス停①、②
・赤 56 赤羽駅西口－高島平操車場「志村坂上区民事務所」下車 徒歩 0 分
MAP バス停③、④
・赤 53 ときわ台駅－赤羽駅西口「志村一丁目」下車 徒歩 5 分
MAP バス停⑤、⑥
・池 20 池袋駅西口－高島平操車場「志村坂上」下車 徒歩 2 分
・池 21 池袋駅西口－高島平駅「志村坂上」下車 徒歩 2 分

各種 SNS

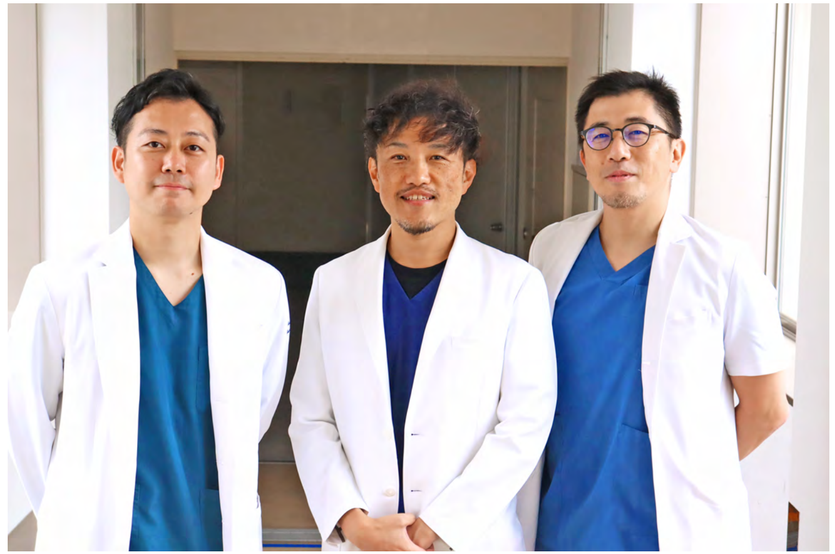
@903irgon
@ims_itachu_official
@itachu_sanfujinka
@itatube8389

IMS グループ広報誌　プラザイムス特別号 Vol.85　2026 年 10 月　　発行　板橋中央総合病院

Special Edition Vol.85

PLAZA IMS 2026

特集：副院長就任記念



「プラザイムス」は、患者さま、ご家族の皆さまに院内やIMSグループの医療活動、病気に関する情報をお伝えするコミュニケーションペーパーです。ご自由にお持ち帰りください。

IMS グループ　医療法人社団明芳会
板橋中央総合病院

救急

救急総合診療科診療部長

副院長　安本（やすもと） 有佑（ゆうすけ）



尽真心

Q1. 自己紹介をお願いします。

串カツ・串焼き屋の3人息子の長男として出生しました。高校までは和歌山県で過ごし、鳥取大学医学部を卒業後、初期研修を島根県の松江市立病院で行い、医師3年目から東京に出て参りました。練馬光が丘病院で3年間総合内科としての研鑽を積み、2019年より総合診療科として当院に赴任し、今年で板中8年目となります。2023年より救急診療、2024年よりハイケアユニット（HCU）の管理にも携わっています。

Q2. 医師を志したきっかけと、現在の診療科を専攻した理由を教えてください。

一番最初は、幼い時に「医師になる」と言うと両親が驚いていたことを面白く感じていたのだと思います。
その後、私が18歳の時に父が他界したのですが、その過程や葬儀を経験し、医師になるということを決断しました。元々は整形外科志望で、学生や初期臨床研修医の時から整形外科の学会に行き、研鑽を積んでいました。しかし、初期臨床研修の地域研修で島根県の隠岐の島に行った際に、ジェネラルに活躍されている先生方に衝撃を受け、一旦総合内科や集中治療を学んでから整形外科に進もうと思い、練馬光が丘病院の門を叩きました。結局その道が楽しくなり、ジェネラルな道に進みました。総合診療は環境によって活動も異なる分野ですが、当院では一般床の病棟管理以外に、救急診療や重症の患者さんの対応、地域連携などを中心に活動しています。

Q3. 地域医療支援病院に指定されましたが、今後どのような医療を提供していきたいですか？

総合診療や救急は、患者さんの旅路を支えるために、周辺の医療機関や介護との連携が欠かせません。これまでも近隣の病院、クリニック、在宅診療所やケアマネージャー、介護施設の皆様と積極的に交流をしてきました。
皆様と顔の見える関係で、安心して患者さんを預けていただけるような医療を提供していきたいと思います。各専門診療科の先生方のような高度な専門性の高い技術は総合診療や救急にはありませんが、質が高く安全な標準的医療を、当院のDNAでもある救急診療を中心に提供します。また平時から密な関係を作ることで、災害やパンデミックなどの有事の際にも連携の中心となれるように備えたいと思います。

Q4. 新病院の移転に向けて、今後のビジョンをお聞かせください。

松尾院長がよくお話しされますが、新病院になったから新たな良い医療が提供できるわけではありません。それに向けての準備は既に始まっています。新病院では救急室も集中治療室も拡大する予定です。また、病院外には、更に地域の皆様と共に過ごす空間が生まれます。その時に、より地域に根ざし、地域の救急診療を支えられるような診療体制を築いていきます。そして、地域の皆様が「板中があるから安心して暮らせる」、「安心して暮らせる板橋に住み続けたい」と思えるようなまちづくりを医療から発信できるようにしたいと思います。また、地域活動として、地域のコミュニティやイベントにも積極的に参加し、地域の皆様と対話していきたいと思います。

Q5. 最後に、ご覧になっている方へメッセージをお願いします。

改めまして、副院長を拝命いたしました救急総合診療科の安本有佑と申します。私の専門領域は総合診療ですが、救急・集中治療、各専門診療科の先生やコメディカルスタッフの力をお借りしながら、板中だけでなく地域の救急診療の更なる発展に貢献したいと思います。これまで多くの医師の先輩や同僚、コメディカルのスタッフ、患者さん・患者家族の皆様から学び、成長させていただきました。板中の職員、板橋の地域の皆様が誇れるような病院としてあり続けられるよう、更に研鑽を積みながら還元していきたいと思います。責任「感」のある医師としてではなく、病院・地域における役割に対する責任を果たすことが私の使命だと認識していますので、細かなことでも遠慮なくお声掛けいただければと思います。これからどうぞよろしくお願いいたします。

内科

総合内科主任部長

副院長　友田（ともだ） 義崇（よしたか）



BE MEN FOR OTHERS
WITH OTHERS

Q1. 自己紹介をお願いします。

このたび副院長を拝命いたしました、総合内科の友田義崇（ともだ よしたか）と申します。2001年に広島大学を卒業してから、広島・北九州・福岡で急性期医療に携わり、ご縁あって2020年から板橋中央総合病院でお世話になっております。この間、広島大学・東京大学で化学療法に対する耐性化メカニズムの基礎研究にも取り組み、医学博士をいただきました。新型コロナウイルス感染症が広がって以降は、当院の感染対策とコロナ診療の責任者を務めてまいりました。2025年にはMBA（経営学修士）も取得し、組織づくりやリーダーシップについて学び直す機会にも恵まれました。ちなみに広島出身で、根っからの広島東洋カープファンです。

Q2. 医師を志したきっかけと、現在の診療科を専攻した理由を教えてください。

医師を目指したきっかけは、実は家族に医療関係者がいたわけではありません。通っていた中学・高校の校訓「Men for Others, with Others（他者のために、他者とともに生きる）」という言葉がずっと心のどこかにあり、人の役に立つ仕事がしたいと思うようになったのがはじまりです。キャリアの前半は呼吸器内科医として専門性の高い医療に打ち込んでいましたが、あるとき人員削減で大きな危機に見舞われた救急病院での経験を通じて、「いろいろな病気を抱える患者さんを、幅広く診られる医師がもっと必要だ」と痛感し、思い切って総合内科医・ホスピタリストへと道を変えました。ホスピタリストとは、特定の臓器や疾患にとらわれず、入院患者さんの全身を診る、米国生まれの医師のあり方です。この働き方に強く惹かれ、日本の医療現場にどう根付かせていくかを、長年のテーマとして取り組んでまいりました。

Q3. 地域医療支援病院に指定されましたが、今後どのような医療を提供していきたいですか？

地域医療支援病院に指定していただいたことは、これまで以上に地域の医療機関の皆さまと手を取り合い、切れ目のない医療をお届けしていく責任を担うことだと受け止めています。副院長としては、病院全体で「安全で最適な医療」というご理念を、より確かな形にしていきたいと考えています。当院のいいところは、大きな組織でありながら、いろいろな部署や職種の間の垣根がとても低く、自然とチームワークが生まれやすい雰囲気があることです。年間およそ12,000件の救急搬送を受け入れる都内屈指の急性期病院として、重症で複雑な病状にもしっかり対応できる体制づくりに力を入れてまいりました。「断らない医療」「顔の見える連携」、そして「安全で最適な医療」、この3つを大切にしていくことが、地域医療支援病院としての当院の使命だと思っています。

Q4. 新病院の移転に向けて、今後のビジョンをお聞かせください。

新病院で実現したいのは、総合内科医のように幅広く診られるジェネラリストが病院全体を支える土台となり、その上でスペシャリストの先生方が専門性の高い診療に思いきり打ち込める、そんな体制です。ジェネラリストとスペシャリストがお互いの強みを認め合い、手を取り合いながら患者さんお一人おひとりのために力を合わせる――それが私の思い描く、次の時代の急性期医療の姿です。感染対策委員会の委員長を務めてきた経験も活かし、平常時はもちろん、緊急時にも安心していただける医療体制を新病院でも実現したいと考えています。建物としての新病院と、そこで働く一人ひとりの意識としての組織文化、その両方を大切に育てながら、次の世代に胸を張って引き継げる病院をつくっていくことが私のビジョンです。

Q5. 最後に、ご覧になっている方へメッセージをお願いします。

このたび副院長という重責を拝命し、身の引き締まる思いでおります。医療機関の皆さま、地域にお住まいの皆さま、そして患者さまお一人おひとりに支えられて、当院は「地域医療支援病院」としての新たな一歩を踏み出しました。今後は総合内科医としての経験を活かし、専門的な医療と患者さんを人として支える医療、その両方を大切にしていきたいと思います。新病院への移転という大きな節目を控え、これからも変わらぬご支援とご指導を賜れれば幸いです。当院に関わるすべての方々にとって、安心して頼っていただける病院であり続けられるよう、スタッフ一同、これまで以上に力を尽くしてまいります。今後とも板橋中央総合病院をどうぞよろしくお願い申し上げます。

外科

消化器病センター（外科）診療部長

副院長　鈴木（すずき） 淳一（じゅんいち）



継続は
才能を凌駕する

Q1. 自己紹介をお願いします。

板橋中央総合病院　消化器病センター（外科）鈴木淳一と申します。私は2006年より2年間、当院での初期研修プログラムに在籍しておりました。その後、当院外科や大学病院での手技の研鑽を行い、2015年4月より当院外科での診療にあたっております。私の医師人生のはじめの一歩、医師としての姿勢を学ばせて頂いたこの地で外科を続ける選択をいたしました。この地域に妥協のない外科治療を提供すること、さらには同様な志を持った医師の育成にも注力したいと考えております。

Q2. 医師を志したきっかけと、現在の診療科を専攻した理由を教えてください。

中学高校と野球部に所属し、丸坊主に眼鏡でした。特に野球以外興味なく、あまり進学に対するモチベーションなく受験勉強をしていたことを思い出します。その様な日常の中で高校3年生時に同居する祖母が癌を患い、一緒に通院する上で、医学に興味を持ちました。その祖母には医学部の入学を伝えることは叶いませんでした。その後に医学部を卒業し、当院の初期研修医として研鑽を積む中で当時の強い思いもあり、外科へ進む決心をしました。外科は手技的にも魅力を感じましたし、色々な科から“最終の砦”として相談も受けることが多く、やりがいを感じる科であると確信を持ちました。患部を直接摘出できることで劇的に回復する患者様を目の当たりにして、この科を一生追求しよう！と心に決めました。

Q3. 地域医療支援病院に指定されましたが、今後どのような医療を提供していきたいですか？

地域医療支援病院という認定は、病院が中心ではなく、その地域を幅広くサポートする、“患者さま”や“かかりつけ医”が中心となる医療圏において、その地域の中核病院が担う大切な役割と理解しております。具体的には第一線の医療を支えるために、①近隣の医療機関との密な連携 ②断らない救急医療の提供 ③次世代を担う研修医の育成を三本柱として提供していくことが重要であると考えております。包括的に地域を支える病院として、「世代を超え、頼りになるやさしい病院」であり続けること、様々な面で地域に密着した関わり方ができるように貢献していきたいと考えております。

Q4. 新病院の移転に向けて、今後のビジョンをお聞かせください。

地域医療支援病院としての役割をさらに強化するための新病院移転と考えております。①高度急性期医療のさらなる強化 ②災害拠点連携病院としての機能強化 ③感染症医療の強化 ④地域医療支援病院としての連携強化が主軸になると考えております。その一員、また外科としての成すべき役割は高度低侵襲医療（腹腔鏡・ロボット手術の拡充）の提供、救急外科の強化（急性腹症への対応の迅速化）、終末期外科患者の地域連携（ACP）などのさらなる地域への貢献ができればと考えております。以上のような役割を果たし、地域のみなさまが気軽に相談に立ち寄れる、風通しの良い新病院になると確信しております。

Q5. 最後に、ご覧になっている方へメッセージをお願いします。

私は東京都荒川区に生まれ、板橋区で初期研修を行い現在に至ります。下町で幼少期を過ごし、高齢化社会を目の当たりにしてまいりました。さらに半世紀が経過し、医療従事者として超高齢化社会超える現状を実感しております。その中で外科ができる役割を常に自問自答し、最善の医療が提供できるように精進しております。ひとりとして生活背景や病状が同じ患者さまはいません。そこに患者さまを中心に個々にあった最善の治療を提供することが我々の義務と考えております。それが“生活の質”に直結するからです。これからも板橋中央総合病院の各診療科が垣根を越えて、そのようなチーム医療を提供できるように全力投球で取り組む所存でおります。今後ともよろしくお願いいたします。